The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ピエール・ニコルにおける神の存在の自然の証拠 ：「神の存在と魂の不死の自然の証拠についての簡略な議論1」に基づいて
Author(s)	川上, 紘史
Citation	Gallia. 2022, 61, p. 13-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/87595
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ピエール・ニコルにおける神の存在の自然の証拠
――「神の存在と魂の不死の自然の証拠についての簡略な議論[1)]」に基づいて ――

川上　紘史

序

「自然」（nature）を証拠とする神の存在証明は様々な護教論的著作に見いだされる[2)]。トマス･アクィナスは『対異教徒大全』においてこの種の存在証明の必要性を次のように述べている。議論は共通の土台を持たなければ成立しない。カトリックの正当性の説得において、ユダヤ人に対しては旧約聖書、異端に対しては新約聖書が共通の土台の役割を果たす。しかし、イスラム教徒や異教徒に対して聖書は土台の役割を果たせない。そもそも聖書の正当性が認められないからだ。この時、万人が同意する議論の土台として自然が登場する。つまり、自然を証拠とする神の存在証明は、聖書の権威を認めるキリスト教とその権威を認めない異教徒との議論を成立させるために必要なのだ[3)]。

ところで、ブレーズ・パスカル（1623-1662）が晩年に企図していた未完の著作―その遺稿集が『パンセ』である―もまた、不信仰者にキリスト教への信仰の正しさを説得することを目標としていた。故に、自然による神の存在証明がそこに見出されてもおかしくはない。しかしながら、パスカルはこの種の説得に否定的である。「これらの人々〔神について論じた人々〕がなんと大胆に神について語ろうとしたかに私は驚き呆れる。不信仰者に彼らの議論を向けながら、その最初の章は自然の作品によって神性を証明することなのだ[4)]。」

なぜパスカルはこの種の説得を否定するのか。この問題をよりよく検討するために、私たちはパスカルが想定している護教論的著作がどのような議論を行なっ

1）Pierre Nicole, «Discours, contenant en abrégé les preuves naturelles de l'existence de Dieu, et de l'immortalité de l'âme», dans les *Essais de morale, contenus en divers traités sur plusieurs devoirs importants*, Paris, Guillaume Desprez, 1733, Vol. II, p. 25-44 ; dans les *Essais de morale*, Genève, Slatkine Reprints, 1971, Vol. I, p. 116-121. 以下、日本語では「神の存在の自然の証拠」と略記し、引用箇所は略号 *DPN* の後にページ数を（原著）;（リプリント）の順で示す。

2）一例として、トマス・アクィナス（1225-1274）の『対異教徒大全』（1258-1265）、レーモン・スボン（1385-1436）の『自然神学』（1436）、ピエール・シャロン（1541-1603）の『三つの真理』（1594）が挙げられる。

3）Thomas d'Aquin, *La Somme contre les gentils*, trad. R. Bernier, M. Corvez, M.-J. Gerlaud, F. Kerouanton, L.-J. Moreau, Paris, Cerf, 1993, I, 2.

4）Pascal, *Pensées*, présentation et notes par Gérard Ferreyrolles, texte établi par Phlippe Sellier d'après la copie de référence de Gilberte Pascal, Paris, Librairie Générale Française, «Le Livre de Poche *Classiques*», 2000, S644-L781. 以下『パンセ』からの引用はこのテクストによる断章番号を記号 S [Sellier] とともに示し、ラフュマ版（éd. L. Lafuma, Paris, Luxembourg, 1952）による断章番号を記号 L とともに付記する。

ているかを確認しなくてはならない。本稿ではパスカルと思想的に近い人物、ピエール・ニコル[5]の「神の存在の自然の証拠」を分析することで、彼らが共有していたと思われる自然による神の存在証明の概念に接近したい。

1. 自然の証拠に対するニコルの評価

不信仰者の説得における神の自然の証拠の有効性をニコルはどう考えていたのか。「神の存在の自然の証拠」が収録された『王子の教育について、三部に分けられ、最終部には万人に有益な様々な概論が含まれる[6]』は1670年、いわゆるポール・ロワイヤル版『パンセ』と同じ年に出版された。おそらくその編集に携わった経験に基づいて、ヴァンサン・カローが指摘するように[7]、ニコルは「神の存在の自然の証拠」でパスカルを意識したと思しき次の言葉を記している。

> そこにあるのは真の宗教を知らないために十分に不幸な人たちを真の宗教に導くために最もふさわしい証拠ではないこと、聖書の確かさを正当化する奇跡と預言から導き出される証拠が頑迷固陋な精神にずっと見事に影響を及ぼすことができることを私〔ニコル〕は認める[8]。

ニコルはキリスト教の「証拠」(preuves)を二種類に大別している。一つは「自然の理由」(raisons naturelles)に基づく「推論」(raisonnements)である。もう一つは奇跡、預言から導出される証拠である。ニコルは、パスカル同様に、後者の証拠の方が不信仰者を「真の宗教に導くために」ふさわしく、有効であると考えている。しかしながら、ニコルは続けて次のようにも述べている。

> しかし同時に、これらの自然の証拠が堅固であり続けること、幾らかの精神に釣り合っていることがありうるので、自然の証拠は無視するべきではないことに私は納得している[9]。

ここにパスカルとニコルの着眼点の違いが明白に現れている。両者共に自然の証拠では限定的な人しか説得できないことを認めている。パスカルはその限定性を否定的に捉える。『パンセ』S38-L3によれば、神が光を与えた「魂」(âme)しか

5) ピエール・ニコル(1625-1695)はポール・ロワイヤル修道院を中心とした思想グループに深く関わっていた。また、彼はパスカルの生前の主著である『プロヴァンシアル』(1656-1657)の執筆に関わるとともにそのラテン語訳、注釈(1658)を行なっている。また、いわゆるポール・ロワイヤル版『パンセ』(1670)の編纂にも関わっていた。ここからパスカル、ニコル両名がキリスト教に関する基本的な考えを共有していたと考えられる。

6) *De l'Éducation d'un prince divisée en trois parties, dont la dernière contient divers traités utiles à tout le monde.* 以下『王子の教育について』と略記する。

7) Vincent Carraud, « Le refus des preuves métaphysiques de l'existence de Dieu », dans *Revue des Sciences philosophiques et théologiques*, Janvier 1991, Vol. 75, N° 1, p. 22.

8) *DPN*, p. 26 ; p. 117.

9) *DPN*, p. 26 ; p. 117.

自然の証拠を証拠として認めることができない[10]。逆に光を持たない魂、すなわち不信仰者は自然の証拠に証拠としての価値を見出せない。そのため、パスカルは自然の証拠を放棄する。

これに対し、ニコルのとる立場は次のようなものである。確かに自然の証拠は万人に有効なものではない。だが、それは全く無益なものではない。なぜなら「幾らかの精神」にはこの証拠は有効だからだ。それは自然の証拠そのものが不安定だからではない。「自然の証拠は堅固であり続ける」。故に、自然の証拠によって神の存在を証明することは無駄なことではない。

この時ニコルは自然の証拠の受け取り手を「精神」(esprit) と表現している。リシュレは精神を「考える実体。判断し、理解し、推論し、そして想像しうるものを発明する魂の部分[11]」と定義している。そして、繰り返しとなるが、自然の証拠を「推論」とニコルは表現していた。以上から、ニコルは自然の証拠は知的能力によって受容されると考えているようだ。

故に、次のようにまとめられるだろう。ニコルはパスカルの批判を認めつつも、一定の読者に対し有効な証拠として神の自然の証拠を評価している。そして、この証拠は精神によって知的に理解されうる。

2. 二種類の神の自然の証拠―形而上学的証拠と感覚的証拠―

ニコルは神の自然の証拠を有益なものと評価している。同時にその有効性が限定的であることも認めている。では、この証拠に頼らねばならない理由を彼はどのように説明しているだろうか。

> リベルタンと不信仰者は聖なる書物の権威から引き出されるほとんど全ての証拠を拒否し、神の存在と魂の不死を否定することで聖なる書物の土台を攻撃したと思い込んでいるので、彼らからキリスト教を守る人たちは、彼らが反対することのできない共通の原理であるかのように、自然の理由に頼らねばならないと思った[12]。

この説明は、基本的には先に見たトマス・アクィナスの説明と同じである。聖書の権威を認めない人たちからの攻撃に対抗するために、不信仰者とキリスト教徒が同意可能な議論の出発点として自然の証拠は要請されるのだ。

では、ニコルはこの証拠をどのようなものだと理解しているのだろうか。すでに見たように、キリスト教の証拠を奇跡、預言から引き出される証拠と自然の証拠にニコルは区別している。そして続く箇所で、「繊細にして形而上学的な推論」

10) S38-L3 :「「なんと。空と鳥が神を証明するとあなたは言わないのですか」「いいえ」「あなたの宗教はそう言っていないのですか」「いいえ。なぜなら、神があの光を与えた幾らかの魂にとってある意味でそのことが真だったとしても、大部分の魂にはそのことは誤りですから。」」

11) P. Richelet, *Dictionnaire français, contenant les mots et les choses, plusieurs nouvelles remarques sur la langue française*, Genève, Jean Herman Widerhold, 1680, *s. v.* « Esprit ».

12) *DPN*, p. 25 ; p. 116.

（des raisonnements subtils et métaphysiques）と対比されることで、「通俗的でより感覚的な」（de populaires et de plus sensibles）推論である自然の証拠はさらに明確に定義づけられることになる。

> ある人達はこれら二つの点〔神の存在と魂の不死〕の両方を証明するために繊細にして形而上学的な推論を発明した（ont inventé）。そして、他の人達は、常に目の前に広げられている偉大な書物[13]に立ち戻るよう呼びかけるかのように、現世の秩序（l'ordre du monde）の考察に立ち戻るよう人々に呼びかけることで、通俗的でより感覚的な推論を提示している（proposent）[14]。

前者はおそらく、デカルトが『省察』（ラテン語 1641 ／フランス語 1647）においてなしているような、知的な観念の純粋な考察から、神の存在の純理的な認識へと至る一種の推論である。これに対して後者は感覚的なものごとの考察に基づいている。ニコルは「神の存在の自然の証拠」において後者について語る。

この二つの推論の説明における動詞に注目したい。ある種の護教論者たちが前者の推論を「発明した」とニコルは述べている。動詞 inventer は、十七世紀には、より一層発明者の知的能力に重きを置いたニュアンスを有していた。実際、フュルチエールは「何らか新しいものを**自身の精神の力によって**生み出すこと[15]」と定義している。そして、この動詞が複合過去形で用いられていることから、形而上学的な推論の発明は発話の時点において完了していると考えられる。以上から、ニコルは形而上学的な推論を、護教論者個人の知的力量によって完成されたものと捉えているようだ。だとすれば、この証拠は完成した一連の論述として与えられることになるだろう。受け手はそれを丸ごと受容するしかない。

これに対して、後者の推論は別の護教論者が「提示している」ものである。フュルチエールはこの動詞に「主張すると申し出られている何らかの議論、あるいは解決が望まれている何らかの疑いを**申し立てる**（*Mettre en avant*）[16]」という定義を与えている。彼の定義が適切に示しているように、この言葉には「前に置く」ニュアンスが込められている。実際、動詞 proposer の語源は「前に置く」を意味するラテン語 *proponere* である。つまり、この推論は論理の積み重ねから導出されるのではなく、むしろ受け手の前に直に置かれるものとして描き出されている。

この時、提示は物事を目の前に置くことでしかない。相手がそれをどう受容するかは相手にかかっている。ニコルはこの点を意識している。だからこそ、こちらの提示したものを理解するために相手が行動することをニコルは相手に要請し

13）世界を本とする例えについては次の研究をみよ。E. R. Curtius, *La littérature européenne et le Moyen Âge latin,* traduit de l'allemand par Jean Bréjoux, Préface de Alain Michel, Paris, PUF, 1956, p. 497-507.

14）*DPN*, p. 25-26 ; p. 116-117.

15）Antoine Furetière, *Dictionnaire universel, contenant généralement tous les mots français, tant vieux que modernes, et les termes de toutes les sciences et des arts*（désormais *Furetière*）, La Haye et Rotterdam, Arnout et Reinier Leers, 1690, *s. v.* «inventer». 強調は引用者による。

16）*Furetière*, *s. v.* «proposer». 強調は引用者による。

ている。「現世の秩序の考察に立ち戻るよう人々に呼びかける」のだ。

この解釈が正しければ、「通俗的でより感覚的な」推論は、受け手が現世の秩序の考察を実践することで受容可能なものといえる。だからこそニコルは動詞 proposer を現在形で記したのだろう。単にそういう推論をした人が過去にいた。その人が完成させた推論に従え、というのではない。護教論の読者である私たちの前にこの推論は今まさに提示されているのであり、私たちが考察することでこの推論を受容することができるのだ。

以上の分析に従えば、ニコルによる神の自然の証拠の分類は、単に推論の主題、方法を形而上学的／感覚的と区別しているわけではない。護教論者が自身の優れた精神の力によって完成させた、私たちが丸ごと受容するほかない推論と、私たち自身が世界の観察を通じて参加することで完成する推論との区別でもあるのだ。

このような区別を踏まえて、ニコルは「神の存在の自然の証拠」において感覚的な証拠を取り扱うと明言している。

> 私が述べたように、抽象的で形而上学的な証拠がある。そして、それらを非難して楽しむことが思慮分別のあることだと私は思わない。しかし、より感覚的で、より私たちの理性に合致した、より大多数の精神に釣り合った証拠もある。そのような証拠は、抵抗するためには、強引でなければならないほどだ。私がこの概論において集めるつもりなのはそのような証拠である[17]。

形而上学的証拠について、ニコルはそれを「非難する」（décrier）[18] ことに言及している。確かに、そのような振る舞いが「思慮分別のあることだと私は思わない」とニコルは述べている。しかし、なぜ形而上学的証拠にだけそのような言及がなされるのだろうか。不信仰者にとっては形而上学的証拠も、より感覚的な証拠も、非難して喜ぶ対象であるはずだから。では、一方の証拠を批判し、他方の証拠の有効性を認めるのは誰か。それはキリスト教の擁護者、すなわち形而上学的証拠をキリスト教信仰の正当性を示すために用いうる人たちの中にいる。自身の武器を自身で攻撃する。この解釈は矛盾して見える。しかし、ニコルと私たちはこの態度をとっている偉大な護教論者を少なくとも一人知っている。すなわち、ブレーズ・パスカルその人である[19]。ここにもまたパスカルの影を見出せる。

17）*DPN*, p. 26 ; p. 117 : « Il y en [=des preuves] a d'abstraites et de métaphysiques, comme j'ai dit, et je ne vois pas qu'il soit raisonnable de prendre plaisir à les décrier. Mais il y en a aussi qui sont plus sensibles, plus conformes à notre raison, plus proportionnées à la plupart des esprits, et qui sont telles, qu'il faut que nous nous fassions violence pour y résister ; et ce sont celles que j'ai dessein de recueillir dans ce discours. »

18）1670 年の『王子の教育について』では「それらを非難して楽しむこと」が「それらを攻撃し、破壊して楽しむこと」（de prendre plaisir à les combattre et à les détruire）であった。Pierre Nicole, *DPN*, dans *De l'Éducation d'un prince divisée en trois parties, dont la dernière contient divers traités utiles à tout le monde*, Paris, La Veuve Charles Savreux, 1670, p. 121.

19）Cf. S222-L190 :「神の形而上学的な証拠はあまりにも人間の推論からかけ離れ、あまりにも複雑なので、これらの証拠が心を動かすのはわずかである。ある人たちにとってこのことが役に立つ時でも、その人たちがこの証明を見ているわずかな間だけしか役には立たない。だが一時間もたてば、その人たちは間違えたのではないかと恐れる。」

しかし、ニコルはここで明確にパスカルと対立しているわけではない。彼は形而上学的証拠への攻撃を否定するにとどまっている。言い換えれば、この証拠を積極的に称えているわけではないのだ。この事実はニコルもまたこの証拠を、不信仰者を説得する手段としてはあまり評価していないことを示している。

他方、ニコルは感覚的な証拠に高い評価を与えている。それは形而上学的な証拠に比べて、「より私たちの理性に合致」し、「より大多数の精神に釣り合った」証拠である。それゆえ、この証拠を否定するためには「強引でなければならない」。無理に否定しようとしなければ否定できない証拠なのだ。

このように見たとき、形而上学的な証拠と感覚的な証拠の対比が説得力の点において成立していることが明らかになる。ニコルにとって、形而上学的証拠はそれを武器として用いる護教論者からも攻撃の対象とみなされかねない程説得力がない。キリスト教の武器となる形而上学的証拠を自ら批判することが間違いだと認めるために理性が発揮されねばならない程に。これに対し、感覚的な証拠は、それを認識した私たちが否定するには無理に抵抗しなければならない程に説得的である。以上のニコルにおける神の証拠の分類を表にまとめよう。

表１「ニコルにおける神の証拠の区分[20]」

	神の証拠			
証拠の性質	啓示		形而上学的	感覚的
具体例	奇跡	預言	純粋に理性的な推論	現世の認識に基づく推論
受容者の姿勢			消極的に受容する	積極的に探求する
説得力			あまりない	説得的

3. 神の存在の自然の証拠

ニコルは「神の存在の自然の証拠」において、否定しがたい神の自然の証拠として感覚的な証拠、推論を提示する。それは大きく分けて次の五つの証拠である。①現世を見ることでこの世界の創造者の存在が本能的に知られる[21]。②物質には創造者がいる。この創造者が神である[22]。③運動の発生と維持には「本源」(principe)がある。この本源が神である[23]。④存在が消滅することはない以上、精神すなわち

20）本表の斜線部にあたる事柄について、「神の存在の自然の証拠」において言及がないことからニコルの見解について判断がつかないために斜線を引いている。
21）*DPN*, p. 26-28 ; p. 117.
22）*DPN*, p. 28-29 ; p. 117.
23）*DPN*, p. 29-30 ; p.117-118.

「考える存在」も消滅しない。この存在は「永遠」(éternel) ではないので本源がある。この本源が神である[24]。⑤現世は永遠ではない。故に本源がある。それが神である[25]。

この五つの証拠の内、本論の論旨と関わるのは1である。とはいえ、他の証拠も神の自然の証拠像を理解する上で重要である。そこで、本節ではまず②〜④について要約する。ついで「神の存在の自然の証拠」のほぼ半分を占める⑤の論述について、簡単に紹介する。そして最後に②〜⑤に示される推論に基づく自然の証拠とは異なる証拠、自然を見たときに形成される印象に基づく証拠を描いた①の部分のテクストを見ることにしよう。

3-1. 物質、運動、精神

ニコルは物質、運動、考える存在すなわち精神の考察から神の存在を論証する。その際、これら三者が「永遠」ではなく「本源」を持つという認識から考察は始まる[26]。「永遠」という言葉を目にするとき、私たちはしばしば終わりのない未来のことだけを考える。しかし、護教論のように神が関係するテクストにおいて、永遠には過去も含まれる。アカデミーの辞書は次のようにこの形容詞を定義している。「決して始まりを持たず、決して終わりを持つこともないであろうもの。この意味は神についてのみ言われる[27]。」別な言い方をすれば、物質、運動、精神が「永遠」でないというのは、それらが始まりと終わりを持つ、という意味なのである。永遠に始まりを含めるこの解釈は強引に見えるかもしれない。しかし、実際に、「キリスト教と異教徒の対立が最も白熱した主題のひとつが宇宙の始まりの主題であった。すなわち、世界は常に存在していたのか、あるいは宇宙の年齢を計算するために十分なデータを私たちが自由に使えるなら、論理的には決定可能なある一日に世界は存在し始めたのか[28]」が異教徒との論争において問題となっていた。そしてニコルは明らかにこの問題を意識している。彼は神の自然の証拠5の記述の始まりとなる部分で次のように述べている。

> 神はまた現世は永遠であるという不信仰な想像から私たちを遠ざけるために、現世に、それなしでは人間も動物も生きることができないこの秩序にお

24) *DPN*, p. 31-33 ; p. 118.
25) *DPN*, p. 33-42 ; p. 118-121.
26) *DPN*, p. 28 ; p. 117 :「というのも、物質と呼ばれるこの死した感覚の備わっていない塊が永遠にして本源を持たない存在だとどうやったら認めることができるのだろうか。」 *DPN*, p. 29 ; p. 117 :「しかし原因もなく本源もなく自身によって永遠全てを通じて存続していく物質を想像することが馬鹿げているのだから、創造されずに存在し永遠の運動を仮定することは一層馬鹿げている。なぜならいかなる物質も自身のうちに自身の運動の本源を持たないことは明白であるから」。*DPN*, p. 32 ; p. 118 :「現世において、物体ではない考える存在があることが疑い得ず、この存在が永遠ではないことが確実ならば、この存在の本源はなにか」。
27) *Dictionnaire de l'Académie française, dédié au roi* (désormais *Académie*), Paris, Coignard, 1694, *s. v.* «éternel».
28) Fernand Van Steenberghen, «La controverse sur l'éternité du monde au XIIIe siècle», dans *Bulletin de la Classe des lettres et des sciences morales et politiques*, Académie royale des sciences, des lettres et des beaux-arts de Belgique, tome. 58, 1972, p. 267.

いて現世が新しいことを少なくとも示す感覚的で大雑把な刻印を残すことを望んだ。そこから人間と動物が新しい[29]という結果になる。このことはそれらの創造主の存在を証明する[30]ために十分である[31]。

この時、「永遠」は「新しい」と対立する概念である。すなわち、「ある時点から現れた」という概念と対立した意味も含めて「永遠」を理解しなければならないのだ。そしてそれは、「始まりがない」という意味に他ならない。

故に、物質、運動、精神が「永遠」ではない、という指摘は単にそれらに終わりがあるという指摘にとどまらない。それらが始まりを持つ、という指摘でもあるのだ。「本源」も同様である。フュルチエールはこの単語を「何らかのものの始まり、源、起源」と定義している[32]。故に、ニコルは神の自然の証拠としての物質、運動、精神にはそれを生み出したものが必ず存在すると考えているのだ。そして、これらを生み出すものが同じ物質、運動、精神ではあり得ないことから、ニコルはそれを「私たちが探している非物質的で全能の本源[33]」だと結論づける。以上が物質、運動、精神から導かれる神の自然の証拠の骨子である。

3-2. 神の存在証明の補題としての人間の新しさ―異教徒が提出した証拠―

前節の引用にあったように、ニコルは現世が常に存在しているのではなく、どこかの時点で新しく作られたことを示すことで、造物主が存在することを証明しようとする。その論拠としてニコルがまずあげるのは山と海である。山が風雨で削れていること、海に土が流れ込むことは誰もが知覚可能な事実である。もし世界が常に存在しているのであれば、山は削れてなくなり、海は埋められているはずである。しかし、現実には山はあり、海もある。故に、現世は山や海がなくなってしまうほど昔から存続し続けているわけではない、すなわち、新しい[34]。

このように現世は変化するのだから、論理的には、いつしか地上は海に覆われることになる。この時、海中で生きられない人間と動物は滅びることになる。このことから、ニコルは永遠の概念を蝶番として人間が被造物であることを示す。すなわち、人間は滅びるがゆえに、人間は永遠ではない。永遠なる存在には始まりも終わりもない。逆に言えば終わりのある存在には始まりがある。故に、人間には始まりがあり、そこまで遡ることも可能である[35]。

29）本論の底本では «ont» と表記されている。これに対し、1670 年の『王子の教育について』では «sont» と表記されている。本論では 1670 年の表記に従う。
30）本論の底本では «prouser» と表記されている。これに対し、1670 年の『王子の教育について』では «prouver» と表記されている。本論では 1670 年の表記に従う。
31）*DPN*, p. 33 ; p. 118 : « Il [=Dieu] a voulu même pour nous détourner de cette imagination impie que le monde fût éternel, y laisser des caractères sensibles et grossiers qui font voir au moins qu'il est nouveau dans cet ordre, sans lequel les hommes ni les animaux ne sauraient vivre. D'où il s'ensuit que les hommes et les animaux ont [*sic*] nouveaux, ce qui suffit pour prouser [sic] l'existence de leur Créateur. »
32）*Furetière*, *s. v.* « principe » : « Le commencement, la source, l'origine de quelque chose ».
33）*DPN*, p. 29 ; p. 117.
34）*DPN*, p. 34-35 ; p. 119.
35）*DPN*, p. 35 ; p. 119.

人間の新しさの別の証拠として、ニコルは人間の発明をあげる。風車、水車、印刷、火薬、羅針盤、これらの発明はどれも仕組みが簡単で、発見するのが困難なわけではない。また、これらの発明は一度発見されたら忘れられないほどに便利で簡単である。しかしこれらの発明がなされたのはほんの数百年前でしかない。もし人間が永遠の存在であったなら、必ずもっと早くこれらの発明は発見されていたはずである。故に、人間は新しい[36)]。

神の存在を論証するための補題であるこれらの議論を目にすることはあまりない。そのため、一見するとこれらの議論がニコル独自の議論であるように思われる。しかし、そうではない。実際のところ、ジェイムズが指摘するように、この議論の原型はアレクサンドリアのフィロン（紀元前 25-紀元 45）の「世界は儚いものではないことについて」の中に見いだすことができる[37)]。フィロン自身は世界が滅びることはないという立場に立っており、世界が滅びるという主張は攻撃の対象となっている。「世界は儚いものではないことについて」の最終部において、永遠であるのに山がなくなっていないこと[38)]、海の減少[39)]、技術から測定される世界の新しさ[40)]が現世が永遠でない証拠としてあげられ、フィロンはその全てに丁寧な反論を加えている。だが、なぜ、ニコルはあえて論駁されている議論を同時代の知識で補強して用いているのだろうか。それはおそらく、この議論がユダヤ人であるフィロンによって攻撃された異教徒たちの用いた議論であるからだろう。言い換えると、この議論は、キリスト誕生前後の時代に、異教徒たちの間で戦わされていた議論なのである。つまり、この証拠はキリスト教の権威を認めないものたちから提出された現世の新しさを支持する証拠なのだ。故にこの証拠を用いることは、論敵の提出した証拠を議論の出発点として採用するという観点から、正当化される。ここから、ニコルがこの議論で扱われる題材を神が残した「感覚的で大雑把な刻印」と表現していた理由が理解できる。これらの議論の題材はキリストを知らない異教徒たちによっても自然の中や人間の営為の中に容易に見出されるほど感覚的なのだ。

36）*DPN*, p. 36-41 ; p. 119-120.

37）E. D. James, *Pierre Nicole, Jansenist and Humanist, A study of his thought*, Netherlands, Martinus Nijhoff, 1972, p. 60. なおジェイムズが参照しているのは次の書籍である。Philon d'Alexandrie, *De Aeternitate Mundi*, éd. Arnaldez et Pouilloux, Paris, 1969. 筆者は以下のものを参照した。Philon d'Alexandrie, « Que le Monde n'est périssable », dans *Les œuvres de Philon juif, auteur très éloquent, et Philosophe très grave, contenant l'interprétation de plusieurs divins et sacrés mystères, et l'instruction d'un chacun en toutes bonnes et saintes mœurs*, translatées de Grec en Français, par Pierre Bellier Docteur ès droits, Paris, Charles Chappellain, 1612, p. 921-975. このテクストを *MP* と略記する。

38）*MP*, p. 969 :「もし世界が永遠だったなら、大地は平坦でないことはないだろう」

39）*MP*, p. 971 :「今や第二の要点、海の減少と縮小に目を向けよう」

40）*MP*, p. 973 :「その上、年齢と科学によって人間という種類について判断することは非常に馬鹿げたことである。というのも、もしこの奇妙な理由に従うならば、その人はこの世界は実に若く、せいぜい一千年前にできたというだろうからだ。そのようにいう理由は、私たちが技術と科学の作者そして発明者とみなしている人々が存在し始めたのが一千年より前ではないからである。」この議論には前提として技術が人間と同じ年であることが蓋然的である以上に必然的だという認識がある。「単に学問は理性的な本性に固有にして慣れ親しまれたものであるからだけではない。同様にそれなしで人は生きられないからでもある。」（*Ibid.*, p. 968.）

3-3. 自然から受ける創造主の印象

3-1、3-2 で見た、ニコルが「神の存在の自然の証拠」においてあげている証拠は、現代の私たちの目には説得力がないように見える。しかし、それらの議論は世界の永遠性というキリスト教徒と異教徒の間で伝統的に争点となってきた主題の一つを踏まえている。のみならず、ニコルはこの主題に関する異教徒自身の主張をキリスト教のために用いている。このことによって、形式的には、現世が始まりと終わりを持つこと、すなわち現世を作り出した超越的な「本源」が存在することは仮想論敵である「リベルタンと不信仰者」も同意せざるを得ない議論の出発点となった。そして、これらの証拠をニコルは「感覚的」なものとみなしている。私たちが現世において感覚によって知覚可能な事実に基づいてこれらの証拠は受容されるのだ。しかし、ニコルが神の自然の証拠として第一にあげているものは更に感覚的である。

> この偉大な世界を見ることで万人のうちに自然に形成される、世界の作者である神がいるという印象を消すために無神論者がどんな努力をしようとも、無神論者はその印象を完全に封じ込めることはできないだろう。それほどこの印象は強力にして深い根を私たちの精神のうちに持っているのだ。それが無敵の推論ではないにしても、それはあらゆる推論と同じだけの力を持つ感覚であり視覚なのだ。この印象に従うために無理をする必要はないが、この印象に反対するためには強引でなくてはならない[41)]。

世界の作者としての神の存在の第一の証拠、それは「印象」(impression) である。ロラン・ティルアンはニコルの『演劇論』(*Traité de la Comédie*) の注においてこの観念を「表現する (exprimer) ／刻印する (imprimer)」という関係から次のように説明している。「俳優たちは自身の魂のうちに彼らが「身振りによって、そして言葉によって外部に**表現する** (*exprimer*)」ことを望む情念を**刻印し** (s'*imprimer*) なければならない。そしてこの情念は次いで観客のうちに刻印されることになる。それ故、演劇的な表現は印象の二つの過程の交差点となる。印象は提示に必要なものであり、提示が不可避的に導くものでもあるのだ[42)]。」この構造自体は「神の存在の自然の証拠」にも当てはまるだろう。この世界に刻み込まれた神の刻印が提示され、それを見ることで観客たる私たちにもまた神の印が刻

41) *DPN*, pp. 26-27 ; p. 117 : « Quelques efforts que fassent les athées pour effacer l'impression que la vue de ce grand monde forme naturellement dans tous les hommes, qu'il y a un Dieu qui en est l'auteur, ils ne sauraient l'étouffer entièrement, tant elle a des racines fortes et profondes dans notre esprit. Si ce n'est pas un raisonnement invincible, c'est un sentiment et une vue qui n'ont pas moins de force que tous les raisonnements. Il ne faut pas se forcer pour s'y rendre, mais il faut se faire violence pour la contredire. »

42) Pierre Nicole, *Traité de la comédie et autres pièces d'un procès du théâtre*, édition critique par Laurent Thirouin, Paris, Honoré Champion, 1998, p. 36, note 9. 強調は原文による。また、古典主義時代の「印象」観念については Louis van Delft, « La crise de Mnémosyne : la similitude de l'impression dans la rhétorique classique », *XVIIe siècle*, N° 182, p. 22-38 を見よ。

み込まれるのである[43)]。

印象は「無敵の推論ではないにしても、それはあらゆる推論と同じだけの力を持つ感覚であり視覚なのだ」とニコルはここで述べている。この印象は感覚同様に受容されるのだ。それはこの印象を他者と完全には共有することができないことを意味する。だから、印象の正しさを他者に説得することもまたできない。しかし同時に、自らがそのような印象を抱いたという事実は、他者のどのような推論によっても否定され得ない[44)]。

このように個人において確実であると同時に、その確実さを他者と共有することが不可能な「印象」が論拠となりうる理由として、ニコルは誰もが同じ印象を抱くことを挙げている。「この偉大な世界を見ることで万人のうちに自然に形成される印象」。すなわち、被造物を見ると、その創造者がいるという印象を人間は抱かずにはいられないのだ。「この印象は強力にして深い根を私たちの精神のうちに持っている」。それは単に他者が提示する推論ではこの印象を拭えないというだけではない。この印象が私たちの知的活動の出発点にもなりうる、ということをも意味している。だからこそ「この印象に従うために無理をする必要はないが、この印象に反対するためには強引でなくてはならない。」世界が何らかの存在によって作られたものであるという印象から出発して知的活動を行うことは自然であるが、その印象そのものを理性によって否定するのは困難だ、とニコルは考えているのである[45)]。では、この印象とは具体的に何からもたらされるのだろうか。ニコルは次のように説明する。

> 私たちの頭上をめぐるあれらの大きな物体の実に規則正しい運動に、決して相互矛盾することのない自然のあの秩序に、互いに支え合い、互いに準備し合うという相互の観念によってのみ全てが存続している自然の様々な部分の驚くべき連鎖に、石、金属、植物のあの多様性に、生命のある物体の驚くべき構造に、生命のある物体の生成、誕生、成長、死に理性が目を向ける時、理性は自身の自然な本能に従いさえすれば、私たちが見ているものすべての創造者たる神がいることに納得する。これらすべての驚異を熟視しながら精神は「これら全ては偶然の結果ではなく、私たちがこの偉大な作品の中に認める全ての完全性を自身に備えた何らかの原因の結果である」というあの隠

43）Cf. S230-L199 :「人が教育されているとき、自然があらゆる事物のうちに自然自身の似姿と自然自身の作者の似姿を刻んだので、ほとんどあらゆる事物は自然の二重の無限の影響を受けていることを人は理解する」。

44）パスカルの『パンセ』S579-L701 において感覚による認識の確実さが描き出されている。川上紘史「『パンセ』における Voir」『Correspondances 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』、東京、朝日出版社、2020 年 2 月 29 日、75-88 頁。また、S132-L98, 99 において感覚の他者との共有の困難さが描き出されている。川上紘史「パスカル『パンセ』断章 S132 における視覚のメタファー —判断の対立—」『GALLIA』第 59 号、大阪大学フランス語フランス文学会、2020 年 3 月 7 日、39-48 頁。

45）自分が体験している印象を理性で打ち消そうとする振る舞いの強引さ、不自然さを、パスカルは『パンセ』S164-L131 で懐疑主義者（ピュロン主義者）に対する批判として用いている。

れた声を聞かずにはいられない[46]。

この世界の規則的で矛盾のないあり方は偶然に生じるとは考え難い。そのため、このあり方を前にした時、人はこのあり方を秩序立て、その秩序を維持し続ける存在があるという印象を抱かずにはいられない。この印象をニコルは「本能」(instinct) と言いかえている。

だが、この感覚[47]が直接私たちに造物主である神の存在を認めさせるわけではない。ニコルによれば、この本能に理性が従うことで神の存在を認められるのだ。ここでの理性の登場は、ニコルが、神の自然の証拠を、あくまでも理性によって神の存在を認めるためのものであると考えていることを示している。

以上、私たちはニコルが「神の存在の自然の証拠」で最初に示す証拠を見てきた。それは後に続く証拠とは違い、直観的な側面が強調されたもの、すなわち現世を見ることによって万人が共通して獲得する「印象」である。だが、この印象がそのまま証拠となるわけではない。印象に従って理性が働くことによって初めて人間は創造主としての神の存在を知的に認めることができるのである。故に、この証拠は感覚的でありながらも「推論」とニコルによって呼ばれているのだ。

結び

以上、私たちはニコルの「神の存在の自然の証拠」を簡単に見てきた。それによって浮かび上がってきたのは異教徒とキリスト教徒、聖書の権威の認定について相入れることのない両陣営が同意可能な議論の出発点としての自然であった。

ニコルが本テクストにおいて取り扱う自然の証拠は私たちが五感によって感知できるもの、感覚的なものである。感覚的な自然、すなわち現世を私たちが主体的に考察することによって、現世に始まりと終わりがあることが導かれ、論理的帰結として現世を生み出した超越的存在が結論される。

ニコルはこの時、現世が永遠であるか否かというキリスト教徒と異教徒の間の伝統的な争点を中心に取り上げている。この時、異教徒の論拠に基づいて神の存在を論理的に証明することで、敵の主張によって自らの主張を補強するという形式を成立させている。

このように伝統と形式を備えたニコルの議論ではあるが、その根底には、万人が自然から受け取る現世の創造者の「印象」がある。ニコルによれば、私たちが現世を見ることで必然的に受け取り、消すことのできないこの印象から出発して理性を働かせることで、私たちは知的に神の存在を理解するのである。

(大阪大学博士後期課程在学中)

46) *DPN*, p. 27-28 ; p. 117.

47) アカデミーの辞書は「本能」(Instinct) を「動物にとって良いものあるいは悪いものを知るために自然が動物に与えたある感覚と運動」と定義しており、人間においても同様である、と述べている。Voir *Académie, s. v.* « Instinct ».